

農民出稼による経済階層昇進性と其の二類型

— 陸前気仙大工出稼の場合 —

川 本 忠 平

Two Types of Economical Ascension as the Result of
Emigration as Seen in that of Farmer-Carpenters of Kesen in Rikuzen

Chuhei KAWAMOTO

まえがき

出稼労働力とは地元にいる家庭の一員として其の労働力が自家労力の一部を形成するが如き地位にあるもの、換言すれば地元家庭経済と直接臍絡の繋がある労働力の他地域への回帰的移動であると云える。従つて出稼先に於ける彼等の経済的活動は直ち地元家庭経済の所得内容に於ける一要素をなしている。斯の如き経済的関連がなければ假令如何程の家族的繋がりがあろうとも、それは出稼ではなく離郷と看做すべきであらう。(1)

彼の Season Arbeiter としての南部杜氏が冬期約四ヶ月出稼先に滞留し、又気仙大工が通年的出稼性格をもつと雖も、それは出稼先に於て別個の経済体を営為するのではなく地元家庭経済と不可離の関係を有する労力の移動である。従つてこれ等農民出稼が地元農村の社会、経済各相に如何なる影響をあたえるかは当出稼研究の重要な一部門をなすと云えよう。本稿に於ては斯かる立場より当気仙大工出稼所得の農家経済に於ける意義及び出稼による地元農民層分解の過程と其の性格に就ての究明を目的とした。尙本稿は南部酒造出稼による農家経済階層昇進性に就ての論考と姉妹的關係を有する研究である。(2)

1. 出稼報酬の農家経済に於ける意義

大工出稼による収入は出稼先市場別により相異すると共に当出稼職能別階級により各々其の労賃額を異にする。普通一人前の大工労賃は食費市場もちで一日平均 350円前後となり、又一

年に於ける出稼日数を約 250日と見做すと年収入は87,000円前後を一般的な実質労賃となす。しかし第2表が示す舎弟の賃銀は原則として引卒者である大工師匠の収入となる。これは既に述べた如く舎弟は弟子上りに至る迄、所謂徒弟奉公としての大工技術取得期間であり師匠より技術的訓練を受けることを目的とする、(3) 従つて大工師匠は弟子の出稼経費を受けもつと共に衣服(仕事着等)小遣い金を支給し、又弟子上りには大工道具一揃を給与することを慣習としている(4) そこで徒弟奉公中、弟子に出した農

第1表 大工市場別出稼者賃金額

市場別	気仙郡 大船渡	盛岡	仙台	青森	東京	横濱	大阪	旭川	平均 日給額
日給額	圓 260	圓 300	圓 300	圓 300	圓 350	圓 450	圓 380	圓 400	圓 342.5

備考：(1) 日給額は食費市場側持ちの場合を示す。但し×印は飯場にて食する場合の食費を差引いた手取賃金。

(2) 昭和26年12月現在の調査に基づく。

第2表 大工職能別用家者賃金額

職能別	大工師匠 (棟領格)	弟子上りに より一人前 になつた者 (5年以上 の大工出 稼経験者)	3年～5 年に亘る 舎弟	3年以下の 舎弟
日給額	400圓	400圓～350圓	300圓～ 350圓	1年弟子、食 費のみ支給 ----- 2年弟子 150圓～200圓

備考：(1) 日給額は旭川市場の場合であり、食費市場側持ちの額を示す。

(2) 昭和26年12月現在の調査に基づく。

家は彼等より現金収入を期待することが許されず、所謂出稼必要条件である技術取得に対する迂回資本投下期と云い得る⁽⁶⁾。安政二年の弟子入り証文によれば10ヶ年の徒弟奉公を普通としていたが現在は5.6年から7.8年の過程を経て最高技術者たる大工師匠の地位を獲得している⁽⁶⁾。従つて師匠に引卒される弟子は平素の小遣及び衣服類更に弟子上りに於ける大工道具一揃の贈与を受けるのみであるが、しかし徒弟奉公中及び出稼期間に於ける食費の支給は見逸すことが出来ない。即ち働き盛りの彼等が一年の大部分を出稼市場で生活することは零細農家の多い当地方に於て飯米節約の重要な意義をもち、自家消費を最少で食い止める有力な方法であつた。更に年季奉公中、師匠の受けもつ諸経費を附加計上すると相当以上の労働報酬となる。

しからば斯かる農民大工出稼により獲得される労銀が彼等の農家経済の上に如何なる役割を演じているか、其の一端の大略を窺い知る為に何れも弟子上りの出稼者によるA、A'、B、C農家(A農家、……上層経済農家にして1町歩以上の土地経営農家、A'農家、……上層経済農家にして5反歩前後の土地経営農家、B農家、……中層経済農家、C農家、……下層経済農家)の経済状況を取り出して吟味してみよう。

A農家は当村に於ける上層経済階層に属し田畑経営面積1町4反をもつ仙台市場への出稼農家であり、A'農家は同じく上層部に属するも其の経営面積は5反2畝の小規模農家であり横浜市場に移動している。又B農家は当村に於ける中層経済農家であり経営面積9反7畝を有し北海道旭川市場に出稼をなすが、C農家は下層経済階層に属し畑1反5畝をもつ岩手県内一関市場への移動農家である。(第3、4表参照)

第2表 農家経済に於ける出稼所得の割合

A農家(上層)	種目	金額	比率		
			1:4	2:4	3:4
(1)	農家總所得	180000圓	100		
(2)	農業所得	120000圓		100	
(3)	農家總支出	100000圓			100
(4)	大工出稼所得	50000圓	27.7	4.16	50.0

備考: (1) 経営面積 水田3反 畑6反(氣仙郡小友村上記と同じ)

村昭和26年12月現在)

(2) 出稼先……仙台市場

(3) 農家總所得の中には出稼所得を含まず

A'農家(上層)	(1) 農家總所得	120000圓	100		
	(2) 農業所得	60000圓		100	
	(3) 農家總支出	90000圓			100
	(4) 大工出稼所得	95000圓	79.1	158.3	105.5

備考: (1) 経営面積 水田3反2畝 畑2反(氣仙郡小友村上記と同じ)

(2) 出稼先……横濱市場

(3) 上記と同じ

第4表 農家経済に於ける出稼所得の割合

B農家(中層)	種目	金額	比率		
			1:4	2:4	3:4
(1)	農家總所得	90000圓	100		
(2)	農業所得	80000圓		100	
(3)	農家總支出	80000圓			100
(4)	大工出稼所得	75000圓	83.3	93.8	93.8

備考: (1) 経営面積 水田5反7畝 畑4反(氣仙郡小友村上記と同じ)

(2) 出稼先……北海道旭川市場

(3) 農家總所得の中には出稼所得を含まず

C農家(下層)	(1) 農家總所得	30000圓	100		
	(2) 農業所得	10000圓		100	
	(3) 農家總支出	60000圓			100
	(4) 大工出稼所得	50000圓	167.7	500.0	83.3

備考: (1) 経営面積 水田無し 畑1反5畝(氣仙郡小友村上記と同じ)

(2) 出稼先……岩手縣一ノ關市場

(3) 上記と同じ

これら各農家の總所得額に対する大工出稼収益の割合をみるに、A農家が27.7%で最も低くC農家(167.7%)に移行するに伴つて高率の出稼所得割合を示している。更に各農家の農業所得に対する収益割合を見るにA農家が41.6%で最も低く、C農家が50.0%で最高率を占めA'及びB農家がこの次に、又農家總支出に対する各農家の出稼所得率に於ては矢張りA農家が50%で最低を示すが、A'農家が最高率の105.5%を占め、B、C農家がこの次に所得割合を表示することは見逸すことが出来ない。

これ等により上層経済階層のA農家は其の農

家総所得、農業所得及び総支出額に対して最も低い出稼収益の割合を示すものと云えよう。これはA農家が最も大規模な土地経営を営み農業所得に於て最高額を示すも、反面農家経営面より出稼労働の自由な移動が制約され出稼所得の低い近距離市場(仙台市)に移動することに基因する。従つて上層A農家は土地生産を主体となし大工出稼による賃労化は寧ろ従的意味をもつ出稼農家と云い得る。

しかるに上層A農家の出稼所得割合をみるに農家総所得に対しては79.1%に該当し、更に農業所得に至つては158.3%の遙かに高い出稼収益割合を示す。尙これが農家総支出額との比率に於ては各出稼農家のうち最高割合を有し、(105.5%)同じく上層A農家の出稼所得が何れも50%以下の低率であつたのと著しい相異を示している。

これはA'農家がA農家と同様に上層経済階層に属すると雖も土地経営面積は5反2畝の小規模農家である為、A農家の如く出稼賃労化に対する農家経営上の制約を受けず、出稼所得の高い遠距離市場に自由に移動することの最も恵まれた農家であることに基く⁽⁷⁾。従つて上層A'農家は出稼賃労化を主体となし土地生産を従とする専業的大工出稼農家としての性格を示すものである。⁽⁸⁾

以上により出稼所得割合よりみた上層経済農家の出稼には二つの出稼農家の類型(A及びA'農家)を指摘し得ると共に、A'農家のそれは既に一言した如く最良条件の出稼を打ち出すことにより、自然的要因より来る経営の不合理的を克服している農家と云えよう。これは又逆に出稼の最良形態を打ち出す為には5反歩前後の土地経営規模を理想となし、一方に飯米の自給及び労力投下の軽少な山林所得をはかりつゝ、他方最高額の出稼収入を獲得している専業的大工農民と見做される⁽⁹⁾。又A農家のそれは経営条件の適正化によつて自然的条件を克服している農家であるが反面出稼の最良条件が崩れている農家であることを意味するものであろう。これは又当農家が土地生産の合理化により出稼賃労化

の必要度が軽減したことを物語るにもかゝらず、彼のA'農家と同様に最高の移動率を占めることは南部酒造出稼にみる杜氏労働と同じく技術的出稼構造より来るものと云い得る。

次に下層C農家に於ける出稼所得の割合をみるに農家総所得よりも出稼所得が高く、(167.7%)又総支出額の83.3%に相当する比率を示している。殊に農業所得の約5倍の出稼収入を獲得していることは当農家経済に於ける出稼所得が極めて重要な役割をもつことを物語る。しかしC農家は出稼形態からみて上層階層のA農家と同様に最良条件の出稼タイプと見做すことは出来ない。

これはC農家が1反5畝の極小規模農家であり飯米の自給が出来ないのみならず、日々現金収入を必要とする日雇の賃労働者としての性格を有し自由に高額賃銀を支給する遠地市場に通年に亘り移動することが許されないことに基く。

(又當階層に属する農家は主食配給帳を持参しないで移動し、これにより自家飯米の不足を補う爲、出稼先での生活費が一般に高く、又安心して家庭を離れ得ない爲、出稼収入も一般に低いのが普通である)

従つて最良条件としての出稼を打ち出せないと言う立場より上層A農家と同じタイプと云えるが、しかしA農家は土地生産の拡大に伴う労力調節面より来る制約に基因するに反し、C農家は農家経済の貧困性に基くものと見做される。

既に述べた如く当出稼は其の必要条件として大工技術取得に関する迂廻資本を要し、下層貧農層よりの輩出を制約する出稼構造を示した。⁽¹⁰⁾しかし万難を排して一人前の大工技術を体得した時には、これが最良条件としての出稼形態を採らないと雖も其の出稼所得は第4表の示す如く極めて重要な役割を占める。殊に現金収益化の機会に恵まれない之等農家に於て叙上の如き出稼所得が、農家経済厚生への有力な要因となることは当然である。

次に中層B農家の出稼収益の割合に於ては上層経済階層のAA'農家と、下層C農家の中間的

様相を示し殊にA'農家の所得率と類似する。しかしA'農家が農家総所得に対してやゝ低い出稼所得割合を示すにかゝらず農業所得割合に於て高率を占めている。これはA'及びB農家共、ほぼ同じ土地経営規模を有するがA'農家は2町1反5畝の山林を所有し、これによる収入が総所得を高額ならしめていることに基く。更に農業所得に於てB農家がA'農家より高額を示し、其の上A'農家の出稼所得がB農家より高額であることがかゝる結果をもたらしたものと云える。これを出稼収益条件よりみるとA, C農家のそれより優れA'農家に劣る構造を示すが、農家総所得、農業所得及び総支出額に対し何れも8割以上に相当する出稼所得を有することは、上層経済階層への昇進性を暗示するものであろう。

次にA, A', B, C, 各農家に於ける農家純益と出稼収益により如何程の純収入を得ているかを吟味するに、A農家が最高額(130,000円)を示しA農家よりC農家に移行するに伴い低下している。殊にAA'農家の純収入はC農家の約6倍、B農家のそれがC農家の約4倍に当る純収入をみることは見逸すことが出来ない。これを

第5表 農家純収入よりみた出稼所得率

	農家總收入 a	支出額 b	出稼所得 c	純収入 (a-b)+c	出稼収益率 $\frac{C}{(a-b)+c}$
A農家	180000圓	100000圓	50000圓	130000圓	38.55
A'農家	120000圓	90000圓	95000圓	125000圓	76.00
B農家	90000圓	80000圓	75000圓	85000圓	88.23
C農家	30000圓	60000圓	50000圓	20000圓	25.00

備考：岩手縣氣仙郡小友村に於ける出稼農家(昭和26年12月)

純収入に対する出稼収入の割合を見るにA農家は約3割8分の収益率を示すもA'及びB農家は何れも8割前後の高率を有し、殊にC農家に至つては出稼所得が皆無なれば純収入の出ない赤字農家であることを表示している。即ちA農家よりC農家に移行するに伴いより高い出稼所得率を示すことは、C農家程農家経済に於ける

出稼所得のより重要な意義をもつと見做されよう。しかし純収入の最も高いAA'農家に於て前者が主として土地生産収入によつて占められているに反し、後者は其の7割6分が出稼収益によるものであることは、既に述べた如くA'農家が專業的大工出稼農家なるに反しA農家が土地生産を主体とする副業的出稼農家であることを裏書きするものである。

之を要するに

(1)、大工出稼所得は上層、A農家に於て最も低い出稼収益割合を示し、下層C農家に移行するに伴い高率となり、出稼による収入が下層経済農家になる程より重要な経済的役割を有することを看取し得た。同時に現金収益の機会に恵まれない地当方に於て斯の如き高額の賃銀収入を獲得することは、農村経済厚生への重要な因子であることを是認し得る⁽¹¹⁾。一方A農家層に於ける出稼所得率が低位であると雖も、これが貯蓄及び教養費にあてられ経済的、社会的に益々確固たる地位を築く重要な要因であることは見逸せない。

(2)、又上層、A'農家はA, B, C各出稼農家とやゝ異なつた出稼タイプを示す。即ち出稼収益の対農家総所得率は低い方より第2位に当り、又対農業所得率は高い方から第2位の位置にあり、更に農家総支出額に対する割合は最高を示す。これは上層、A農家の出稼所得割合が何れも最低位であつたのと比較して上層の出稼農家には二つの出稼類型(專業的出稼農家、副業的出稼農家)があることを認め得る。

(3)、更に各農家に於ける出稼所得と農家純収入との関係より、下層、C農家は出稼所得がなければ純収入の繰り出せない赤字農家である。従つて出稼収入が生計を維持すると共に経済階層昇進に対する重要な役割を演じている。更にB農家に於ては農業所得と総支出額が殊んど平均状態にあり、従つて純収入は出稼所得のみによつて占められている傾向をみる。かくして大工出稼所得による農家経済的意義及び経済階層昇進性は、C, B農家層に最も顕著にあらわれるも、中層B農家より上層農家への昇進に対し

ては土地生産を主体とする出稼農家と、出稼賃
 労化を主体とする移動農家の何れかを撰択する
 もの、如く推察される。(次節詳論)

(4)、概括すれば当大工出稼は其の技術取得に
 対し一定の迂廻資本を必要とする為、下層貧農
 層の参加の困難な構造を示すが、万難を排して
 一人前の大工農民となりたる時には地元農家経
 済を支える重要な一部門を形成し、上層農家の
 それは益々其の地位を強固ならしめ、下層のそ
 れは自家経済を維持すると共に経済階層昇進に
 対する有力な要因となることは疑いを入れない。

2. 出稼収入による田畑山林増加の傾向

出稼による労銀が農家経済にあたえる影響一
 就中経済階層の昇進に対する重要な要因である
 こと一に就ては既に述べたところであるが、果
 してこれが農家経済階層の昇進を促すや否やの
 具体的考察は残された課題である。そこで出稼

卓越農村、小友村の大工出稼者 245名のうち、
 大工成金と呼ばれる上層経済層に属する出稼農
 家10戸同じく中層10戸及び下層農家10戸を選定
 し、主として明治以後の田畑、山林所得関係の
 消長につき各戸訪問聴取り調査及び役場土地台
 帳に基き調査した。

これによると現在大工成金と呼ばれる上層農
 家の土地所有面積は、田畑平均9反8畝、山林
 面積1町3反9畝となる。(第6表参照) これは
 当村に於ける1戸当り平均田畑面積5反6畝
 を遙かに上まわる所有面積であり当地に於ける
 上層農家である。

しかしa農家よりf農家に至る田畑、山林所有
 形態と、gよりj農家に及ぶそれとはやゝ趣を異
 にすると云えよう。何故ならば前者の諸農家は
 既に述べた上層A農家型の出稼構造を示し、後
 者は上層A'型の出稼農家と見做されるからで
 あり。即ち土地生産を主体とする副業的出稼農
 家と、田畑面積の小規模な專業的出稼農家に分類

第6表 出稼による土地増分関係より見た農家経済階層の昇進性

農家数	昭和 26 年		昭和 20 年		明治 20 年		増 加 面 積		出稼代数	
	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積		
現 在 大 工 出 稼 を な す	a	反 14.5	反 6.4	反 14.5	反 6.4	反 4.0	反 0	反 10.5	反 6.4	4
	b	14.1	15.0	13.0	15.0	4.8	0	8.2	15.0	5
	c	16.1	13.0	16.0	13.0	5.0	5.0	11.1	8.0	4
	d	7.2	2.7	7.2	2.7	2.0	0	5.2	2.7	3
	e	7.6	4.4	7.6	4.4	4.0	0.3	3.6	4.1	3
	f	9.8	6.4	9.8	6.4	6.0	0.2	3.8	6.2	3
上 層 農 家	g	9.8	23.5	5.8	19.5	0	0	9.8	23.5	4
	h	5.2	21.5	15.7	11.5	2.3	0	2.9	21.5	5
	i	4.3	27.0	1.6	23.0	0	0	4.3	27.0	4
	j	9.8	20.0	8.5	15.8	3.5	1.4	6.3	18.6	5
平均	9.8	13.9	9.97	11.8	3.2	0.9	6.6	13.0	4	

備考：10年以上の出稼年数を有する家族1人を1代と見做した。従つて同一家族より同時に10年以上の2人の出稼者を見る時は出稼代数は2代となる。

することが出来る。これ等の農家に於ける明治
 20年当時の田畑山林所有面積をみるに、1戸当
 り平均田畑、3反2畝、山林9畝の零細農家で

あり何れも下層農家と見做される。しかるにこ
 れが、それ以来平均4代の出稼代数を経た現
 在、田畑面積平均6反6畝山林面積1町3反の

増加を示し上層階層に昇進して来たことは見逸すことが出来ない。

次に現在大工出稼をなす中層農家をみるに1戸当り平均田畑面積5反4畝、山林5反5畝となり上層農家のそれより遙かに少ない。しかしこれ等の中層農家のうちa', b'農家は上層A'型出稼農家のタイプと類似する。即ち出稼所得の最良条件を打ち出す為には耕地面積の拡大を一定限度におさえ、反面労力投下の少ない山林を獲得し所謂上層A'農家にみる専業の出稼農家に昇進せんとする過渡的形態と見做される。又c'よ

りj'農家に至る諸農家は出稼所得により田畑を獲得した飯米自給農家であると共に、やがて上層A型及びA'型出稼農家の何れかに昇進せんとする農家である。これ等の中層出稼農家の明治20年当時に於ける田畑、山林所有関係をみるに、1戸当り平均田畑1反5畝山林6畝となり上層のそれよりやゝ狭少であるが、何れも当時に於ける下層農家と見做される点に於て同似性をもつ。しかし平均出稼代数3代を示し、田畑面積3反9畝、山林4反9畝の増加をみせ中層経済農家に昇進して来たことは注目すべきであ

第7表 出稼による土地増分関係より見た農家経済階層の昇進性

農家数	昭和 26 年		昭和 20 年		明治 20 年		増加面積		出稼代数 明治20年以來	
	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積		
現在大工出稼をなす中層農家	a' A'型農家	反5.9	反11.0	反3.7	反11.0	反3.0	反0	反2.9	反11.0	4
	b' 出家	6.2	14.0	5.3	9.9	1.1	0.7	5.1	13.3	3
	c'	5.2	6.0	0	6.0	3.0	4.0	2.2	2.0	3
	d'	5.0	5.2	4.5	5.2	0	0	5.0	5.2	4
	e'	3.7	0	0	0	0	0	3.7	0	2
	f'	5.2	6.6	11.3	6.6	4.0	0.8	1.2	5.8	5
	g'	8.9	4.0	8.9	0	3.4	0	5.5	4.0	2
	h'	2.7	5.0	1.7	1.0	0.5	0	2.2	5.0	3
	i'	7.3	0	2.7	0	0	0	7.3	0	3
	j'	4.2	2.7	2.3	2.7	0	0	4.2	2.7	3
平均	5.4	5.5	4.0	4.2	1.5	0.6	3.9	4.9	3	

備考：第6表と同じ

ろう。(第7表参照)

次に現在大工出稼をなす下層農家のそれについては平均田畑2反5畝山林1反1畝を示し、中層のそれより遙かに狭少な所有面積である。従つてこれ等農家は飯米自給の出来ない農家であり、既に述べた如く出稼所得の最良条件を打ち出せない農家層であると云える。殊にa'からh'農家に至つては若干の自家所有耕地を有するがi', j'農家は耕地をもたず小作農家として地主層に依存する農家である。

しかし明治20年当時のこれ等農家の土地所有状況は、現在中層出稼農家のそれと殊んと同様

であり又上層のそれとも大差がない。殊に当時中層及び上層農家と見做されるa'e'農家の存在は、寧ろ転落農家として見逸し得ないものがある。a', e'農家は大工出稼により建築請負業者として発展したがこれに失敗し其の産を失した農家である。又b', c', d'農家は2代或は3代の出稼代数を有するも火災、家族の病氣等の諸事情により、経済階層昇進の顕著に現れないものであり又f'からj'に至る農家は近年に至つて出稼を開始した農家であることによる。

以上は現在大工出稼をなす上層(大工成金)中層、下層経済農家の田畑、山林所有関係を明

第8表 出稼による土地増分関係より見た農家経済階層の昇進性

	農家数	昭和26年		昭和20年		明治20年		増加面積		出稼代数 明治20年以來
		田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	田畑面積	山林面積	
現在大工出稼をなす下層農家	a'	反2.0	反0	反0	反0	反6.0	反10.0	反4.0	反10.0	3
	b'	3.5	4.5	2.1	4.5	3.0	0	0.5	4.5	2
	c'	2.0	0	0	0	0	0	2.0	0	2
	d'	3.2	2.0	0.4	0	0.4	0	2.8	2.0	2
	e'	2.9	0.6	1.3	0.6	4.0	10.0	反1.1	反9.4	2
	f'	3.6	1.0	0.5	0	0	0	3.6	1.0	1
	g'	3.2	2.0	1.2	5.0	0	0	3.2	2.0	1
	h'	4.5	0.8	4.0	0.8	4.1	0.8	0.4	0.8	1
	i'	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	j'	0	0	0	0	0	0	0	0	1
平均		2.5	1.1	1.0	1.1	1.8	2.1	0.7	反1.0	2

備考：第6表に同じ

治20年以降について考察したものであるが、これ等によつて次の諸項目を抽出することが出来る。

(a.) 出稼発祥時の農家層

現在出稼をなす上層、中層、及び下層農家と明治20年当時の経済階層は、何れも下層農家の見做される弱体土地生産農家である。これは多少の时期的づれはあるが大正3年当時に於ける当村の田畑面積（田、115町2反5畝10歩畑、165町6反6畝15歩、計280町9反1畝25歩）と農家1戸当り平均耕地面積、（農家戸数325戸、1戸当り8反6畝）及び出稼農家の土地所有関係を比較する時、此の間の消息がより明瞭となると思う。即ち当時に於ける農家戸数325戸のうち1町歩以上の土地所有農家は68戸（全戸数の2割1分）となり、内大工出稼農家は9戸（1割3分）に過ぎない。又当時の出稼農家は約160戸と推定され全農家戸数に対して其の4割9分が出稼農家である。従つて1町歩以上の出稼農家の全出稼農家数に対する割合は僅か6分に当り、其の9割4分が1町歩以下の土地所有農家よりの出稼者により占められている。

従つて農民大工出稼の発祥当時に於ては（明

治20年前後を基準としてみた場合）少数の経済的上層農家と、より多くの下層及び中層農家がこれに参加するに至つたものと見做され主としてこれが飯米節約の役割を有した。安政2年の弟子入り証文に10ヶ年の年季奉公に出るのを普通とし、弟子上りの後に於ても1年の大半を他所で働くことは飯米節約上重要な農家経済的意義を有した。こゝに賃労化の機会に殊んど恵まれなかつた当時に於て、土地生産の弱体なる下層農民がより多くこれに参加したことは当然と云えよう。従つて当出稼発祥時に於ける出稼動因は土地生産の弱体に伴う飯米節約を主要因となし、一般に下層農民がより多くこれに従事したものと推察される。⁽¹²⁾ 彼の紀伊半島南海岸に於ける海外出稼者が生活苦、農業水産業の不振のため出稼を惹起したのではなく、隣接刺戟或は勧誘を發祥動因とするのと相異するところである。⁽¹³⁾

しかるに其の後、諸産業及び交通機関の發達に伴い賃銀労働の機会がより多くあたえられ、其の上従来の住込み奉公制が崩れるに伴い飯米節約の意義が半減するに至つた。かくして少くとも5、6年の技術取得期間——無収入の修養

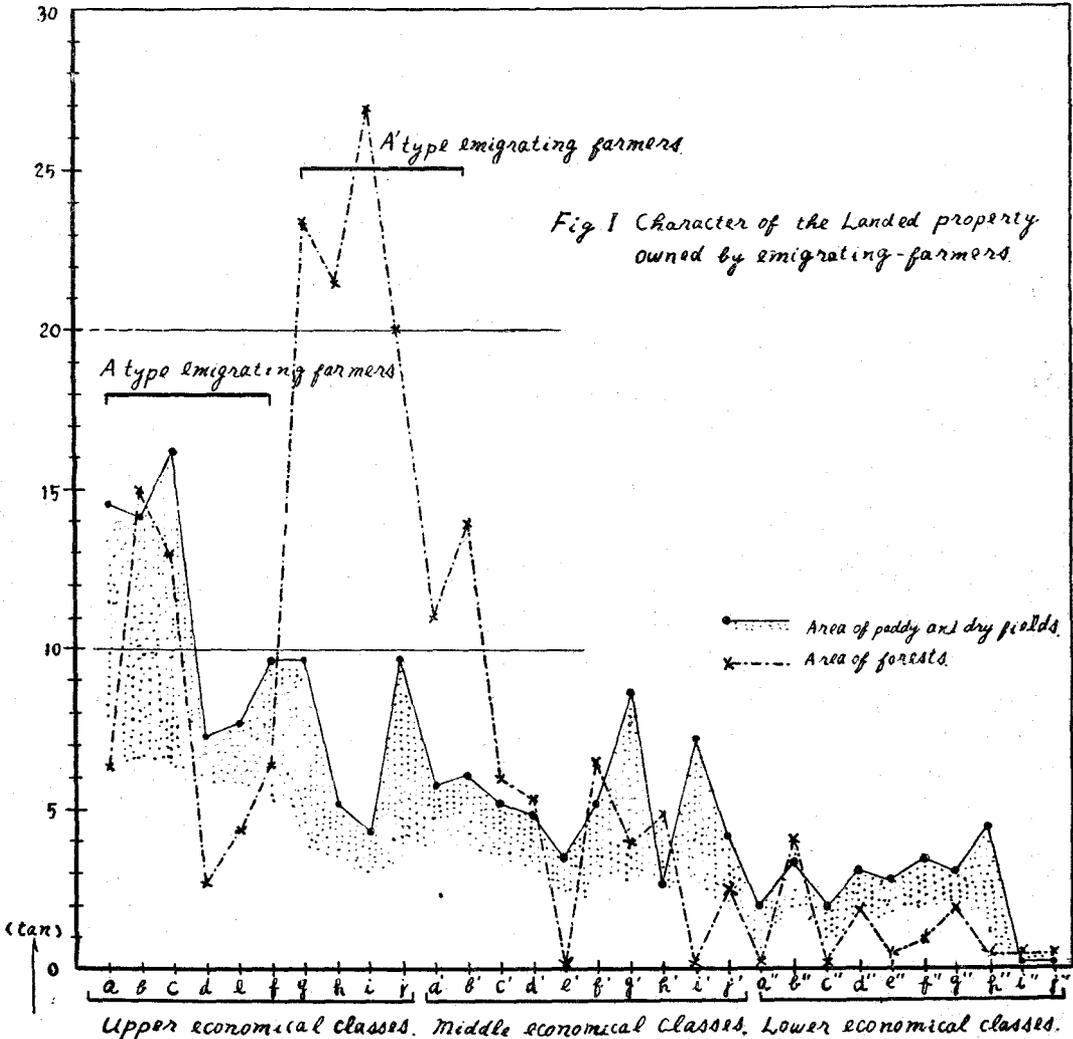
時代——を維持し得る農家が大工出稼農家となり得る資格を有するに至つたと解せられる。こゝに経済的余有をもつ上層及び中層農家がより多く大工出稼に参加する構造を示し、下層貧農層は即時現金収入のある一般筋肉の出稼に従事する傾向を示すに至つたものである。

彼の村民経済階層別大工出稼に於て上層農家よりの移動率が最も高く、(38.4%)中層がこれに次ぎ(15.1%)下層のそれが最低(11.5%)であつたのも、かゝる結果に基因するものである。(14)しかしこれ等農家は前表が示す如く出稼発祥当時、何れも経済的下層農家と見做さ

れ、漸次中層或は上層に昇進して来たものであるが、これが前述した諸事情と相俟つて現在に於ける出稼給源階層の中核となるに至つたものであると云えよう。

(b.) 経済階層昇進性と出稼代数

現在出稼をなす上層農家及び中層、下層農家は其の前身に於て多少の相異はあるとしても、何れも土地生産の低い下層農家と見做された。しかるに現在の経済的地位に於て、かゝる差異をもたらしたのは、もとより種々なる要素があるうが其の一因として先に示した出稼代数が重要な因子となることは疑いを入れない。



第1圖 出稼農家の土地所有形態

現在「大工成金」と呼ばれる上層出稼農家は明治20年以來、平均4代の出稼代数を示し、中層のそれは平均3代、下層が平均2代となり、経済階層昇進度は概して出稼代数と正比例的關係を示すことを看取し得る。これは南部酒造出稼による農家経済階層の昇進が、出稼代数と密接な關係を有し、農家の世襲的年中行事の一つとして之を継続する時、はじめて上層のそれに昇格する光榮に浴し得たのと同じ性格と云えよう。(15)

(c.) 経済階層昇進の内容と其の二類型

出稼収益による経済階層昇進の内容は何れも田畑を獲得し、飯米自給農家となることを第1期段階となしている。

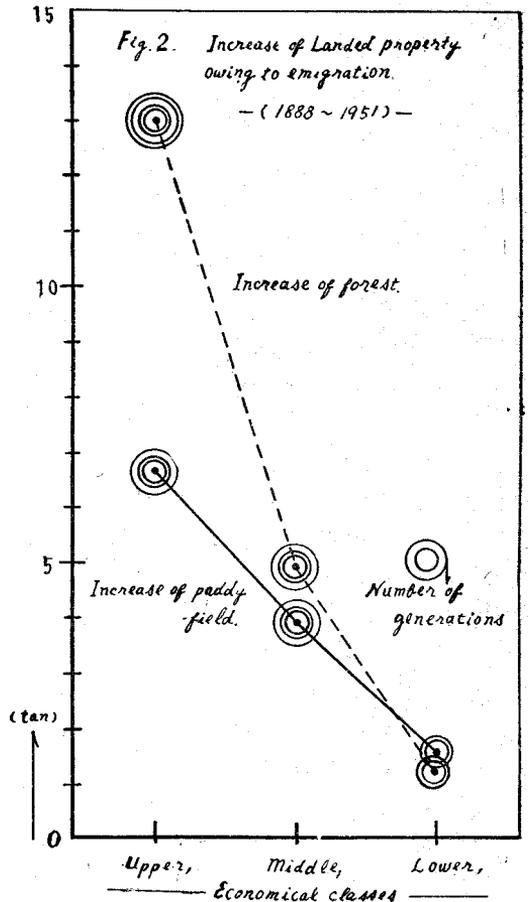
飯米自給に必要な5反歩前後の土地獲得後に於ける出稼収益は、更に進んで耕地の拡大に投下されるか、或は山林獲得に向けられる。かくして第1図の如く上層A型出稼農家と、上層A型出稼農家の二類型が打ち出される。

これを出稼所得による田畑、山林別面積の平均増加をみると、下層出稼農家は山林よりも田畑面積が遙かに高い増加を示すも、中層及び上層出稼農家は逆に山林増加面積が著しく高い。

(第2図参照) 即ち山林増加面積100に対する田畑増加の割合は下層が123%、中層が80%、上層のそれが43%に当り、一般に田畑よりも山林面積の増加傾向が強く、殊に上層A型出稼農家のタイプをとるものが多い。

これは当地方に於ける耕地面積が一般に狭少である為、(昭和24年に於ける小友村1戸當り農家耕地面積5反6畝、氣仙郡下農家1戸當り耕地面積水田1反8畝、畑地4反1畝計5反9畝の零細である)

1坪の耕地と雖も其の獲得に極めて困難を伴う。従つて飯米の自給が確保されると比較的獲得し易い山林入手の傾向を示すが、これが又出稼収益の最良形態を打ち出す必要条件と符合し、こゝに山林面積の増分がより強く現れ且つ上層A型出稼農家のタイプをとる農家層がより多く輩出するに至つたものと解せられる。殊に自己所有の山林より原木を切り出し材料技術共、自己負担に於て經理する出稼の一類を見る



第2圖 出稼による土地増加面積

ことは、(請負業) 彼の陸奥二戸地方の漆かき出稼による昇進農家が(自前、雇入れかき子制)山林地主的性格をもち、自己所有の山林に漆樹の植林をなし、かき子を雇つて漆液を採取するのと同じ構造と云える。(16) これは既に単なる出稼賃労働者ではなく資本主義的經營の一貫として企業化された一類型であろう。

又上層A型出稼農家は田畑所有面積平均1町2反、山林面積9反を有するに反し(総所有面積の4割3分が山林面積)A型出稼農家は田畑面積平均7反、山林面積2町歩を占める。(総所有面積の7割4が山林面積)しかしA型出稼農家と雖も耕地所有面積1町2反前後を其の基準となし、又A型出稼農家のそれは7反歩前後の所有を示し、他は主として山林の拡大、或は生

活水準の高揚に投下されるものと推察される。これは南部杜氏出稼農家の土地可耕面積のマキシмумが3町2反前後にあつたことと對比して興味ある課題である。(後日詳論)

まとめ

以上により一応其の要約を摘記すると。

気仙地方に於ける農民大工出稼は其の発祥当時は、(明治20年前後を基準とした場合)一般に土地生産の弱体なる農家が出稼給源階層の中心となり、主としてこれが飯米節約の役割を有した。しかし一人前の大工技術を獲得した農民大工の労賃は、彼等の農家経済を維持し且つ経済階層を昇進せしめる重要な因子となり、出稼発祥当時下層経済農家と見做されたものが上層及び中層経済農家に昇進し、これが歴史的伝統的移動性を有するに至つた。更に住込み年季奉公制がくずれ飯米節約の意義が半減すると共に、農民賃労化の機会がより多くあたえられるに至り、一般の下層農民は一定の迂廻資本投下を必要とする当大工出稼をさけ即時現金収入のある筋肉的賃労働に参加する傾向を辿つた。

かゝる結果として現在に於ける農民経済階層別出稼率が上層に最も高く下層に移行するに伴い低率を示すに至つたものと解せられる。

又当出稼による経済階層昇進性を田畑、山林獲得傾向より吟味する時、一般に飯米自給に必要な5反歩前後の耕地所有を第一となし更に進んで田畑面積の増加をはかり、所謂土地生産を主体とする出稼農家の一群と、(上層A型出稼農家)他方耕地面積は飯米自給程度におさえ山林拡大をはかる専門的出稼農家(上層A'型出稼農家)の二類型が存在するが概して山林獲得の傾向が強く現れる。これ等は耕地面積に恵まれない当地方の自然的条件及び通年の出稼に伴う農業投下労力との調節面より来る経営的要因等に基くものと見做される。又出稼所得による経済階層の昇進度は出稼代数と正比例的關係を表示することを看取し得たと共に、A'型出稼農家の中には山林地主的性格が強く且つ当出稼をして資本家的経営としての大工企業化(建築請負

業)の構造をとるものゝあることは見逸すことが出来ない。

かくしてこれを出稼成立条件よりみると上層A型出稼農家は、出稼収益の最良条件を打ち出し得ない出稼構造を示すが一方土地生産収益が高く、又上層A'型出稼農家は飯米自給に止まる土地生産を示すが他方最高額の出稼収益を有し、更に山林所得と併せて益々上層階層としての経済的、社会的地位を強固ならしめている階層である。又一定の技術取得期間をもち万難を排して迂廻資本を投下することにより当大工出稼に参加した下層農家は、自家経済を維持する重要な収入源となると共に、これが世襲的に継続されることにより漸次経済的上層農家に編入される光榮に浴するものと云い得るのである。

以上、気仙大工出稼の地元農村にあてる経済的影響の一端を述べたが、力足らず、充分なる表現を成し得なかつたことを遺憾とする。しかしこの小論にして気仙大工出稼の当農村経済に占める役割の一端を知る機縁ともなれば筆者にとり心からの欣びである。

註及び参考文献

- (1) 中島仁之助：我が國に於ける職業別並地方別勞力移動序説(上)(勞働移動に關する調査其の1)社會政策時報 No.199,10.
- (2) 川本 忠平：南部酒造出稼による農家經濟階層の昇進性に就て 新地理 4(10).
- (3) ————：陸前氣仙地方に於ける大工職出稼(3つの農民出稼の比較論)東北地理4(3-4), 5.
- (4) ————：農家次三男出稼の社會地理的一視角(陸前氣仙大工出稼の場合)岩手史學研究 No.11.
御弟子入證文之事(安政二年十二月四日)
「拙者子供文作儀……御奉公中洗たく小遣は先生様方にて可被下置……首尾好御奉公仕り引込候節は一通り細工道具被下置候様奉願上候……」
- (5) ————：註(3)と同じ
- (6) ————：註(4)と同じ
- (7) ————：陸前氣仙大工出稼の移動範圍と其

- の距離的性格の一考察 岩大學藝學部研究年報 3,119.
4. 農家經營規模と移動距離 } 参照
5. 農家經濟階層と移動距離 }
- (8) 池田 善良：出稼群の諸形相. 社會政策時報 No. 220,74.
出稼群の所得構成に於て、主業收入、收業收入、出稼收入其他收入に分類し、73戸の出稼農家の分析をなしている。これによると主業收入皆無にして出稼收入を基本とし其の他を補助収入とする出稼專業家族が14戸、又出稼収入が主業收入より多額、又は同額以上のもの26戸を指的することが出来る。
- (9) 川本忠平：註(7)と同じ
- (10) ————：註(8)と同じ、出稼移動率は上層38.4% 中層15.1% 下層11.5%を示す。p.4第1表 参照
- (11) 久保佐土美：但馬農民出稼の研究. 社會政策の時報, No.177,47.
出稼収入額は(主として酒造、凍豆腐製造出稼業)農業總収入額の約3割3分、農業現金収入の約5割5分を占め農村經濟厚生の重要な役割を演じている。
川本 忠平：註(2)と同じ、p.47第2表参照
- (12) 佐藤 元重：越後杜氏の研究(積雪農村經濟史の一駒)日本歴史, No.28(9),30.
耕地面積の不足と年々の豪雪に襲はれる新潟縣三島郡の塚の山地區は全村酒造出稼人として關東へ季節的勞働に出たが、何れも食料の消費節約という出稼動因をあげることが出来る。殊に兼業農家乃至零細農家はこの傾向が強い。従つて飯米節約は出稼の共通的原因の1つと見做される。
- (13) 岩崎 健吉：紀伊半島南海岸に於ける海外出稼の研究(第2報)地理學評論, 13(3)
- (14) 川本 忠平：註の(3)と同じ。p.4
- (15) ————：註の(2)と同じ。p.53 p.55 酒造出稼による土地増分關係グラフ参照
- (16) ————：陸奥二戸地方に於ける漆かき出稼の研究 未刊
一漆かき出稼による農家經濟階層の昇進性に就て
漆かき出稼は、自前(自營)雇入れかき子制と自分で原木を購入し且つ自分で生漆を採取する自前制と、更に一般職工としてのかき子の3つに類別される。現在上層農家にみる自前、雇入れかき子制の中には所謂資本主義的農家經營の一貫として當出稼をとり入れたものがある。(氣仙大工出稼研究第4報)

ABSTRACT

- (1) The seasonal emigration of farmer-carpenters of Kesen District, in the beginning of its history, chiefly consisted of the poor farmers, and its main role was to save their scanty food.
- (2) But afterwards, as the opportunities for earning ready money increased as the result of social and economical changes, the poor farmers took to manual labor, from which they could get cash more readily. Carpenters are skilled laborers. A certain period (i. e. 5 or 6 years) of apprenticeship must be spent before the poor farmers become full-fledged emigrating carpenters and no wages is paid during the apprenticeship. This is the reason why the higher classes of farmers show a higher ratio of emigrants.
- (3) The money earned by emigratory farmers is spent first in acquiring farm land (about five tan) which is necessary for securing sufficient amount of food for self-support. Then two types of farmers come into existence: A type of farmers who purchase more farm land and become upper class emigratory farmers with the farm products as their main source of income and A' type of farmers who, restraining themselves from buying more farm land than is

necessary for securing self-sufficient food, expand their forest land and become professional emigratory carpenters.

(4) The degrees of economical ascension by means of the profit of emigratory labor are in direct proportion to the number of the generations engaged in this kind of labor. And it is noteworthy that many of the 'A' type emigrating farmers assume the character of a forest landlord and adopt this farm of emigration as an item in the capitalistic

farm-managing system.

(5) Thus we may safely conclude that the profit gained from this emigration not only constitutes an important source of income for the maintenance of the economical independence of the family, but also enables the emigrating farmers, by continuing this practice for several generations, to enjoy the blessedness of entering the upper economical classes of farmers.